

中国・太湖の家船生活者と水辺環境

琵琶湖博物館 学芸技師 楊平



太湖の位置

日本には「うまい水」、中国では「あまい水」という表現があります。豊かで安全な水が求め続け

られている現在、人々は、日常生活のなかでどのように「水」や「水辺」と接しているのでしょうか。

中国・江蘇省太湖では、古くから多くの「家船生活者」（中国語名で「連家船漁民」）が太湖の「水」や「水辺」と関わりながら暮らしてきました。太湖の家船生活者は、家船以外に漁業をするため、家船よりもやや小ぶりの舟をもっており、それで漁業



を営んでいます。

家船は、太湖の岸辺に近い特定の場所に停泊していることが多いです。通常、家船の停泊

する船溜まりには、数艘の家船がかたまつて停泊しています。船溜まりは場所によって様々な形態をとりますが、一つの典型的な例として無錫市近郊の船溜まりを模式化すれば、図の通りです。図の両側に沖へ向けて長いヨシ原は、家船の人たちによって、年代をかけて作られたものです。このヨシ原ではヨシそのものの利用もありますが、家船に対する風除けと家船の安

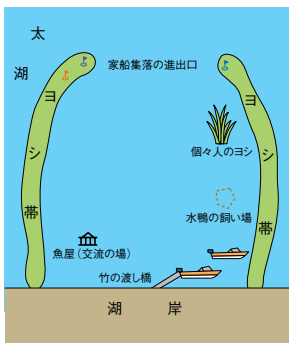
定した停泊のためでもあります。この二つのヨシ原の間がいわゆる門にあたり、地元太湖漁民は「進出口」と言います。この船の沖側の水辺空間に対して、その家船は特定の権利を持っています。そこでカモを飼ったり、ヨシなどの植物を植えたりするのです。また、家船の人たちは、通常、畑も持っています。古くからの船溜まりを利用している人たちが、奥まったやや恵まれた畑を利用し、新しく来た人たちは沖に近い方の畑を利用します。中国の近代化にともない、太湖と暮らす家船生活も変化を余儀なくされつつあります。湖周辺の農山漁村における「水」あ

るいは「水辺」がどのように変貌してきたのかを捉えていくことは、今後、さらに必要になってくるでしょう。



家船と、その沖合の家船の人たちによってつくられた細い長いヨシ原

船溜まり簡略図



湖国のエコなおけ風呂

琵琶湖博物館 学芸員 老文字

滋賀県は、琵琶湖を中心に4つの地域（湖北・湖東・湖南・湖西）に分けられ、地域色豊かな生活文化を育んできました。おけ風呂もまた、それぞれの地域で、風土に密着して育まれてきた文化のひとつです。

で少量の湯を沸かし、体をつけるだけでなく、桶に笠やふたをして蒸気で桶内を温める、お風呂とサウナの中間のような風呂です。

特に、湖北・湖東で使われてきたおけ風呂の形は、横から扉を開けて入る独特のもので、全国的にみても特異な形をしています。琵琶湖博物館の収蔵庫には、6つのおけ風呂が保管されており、C展示室の富江家では、湖東のおけ風呂が展示されています。



また、おけ風呂には、風呂桶の形だけでなく、その使い方に、環境にやさしい「くらし方を考えていくための多くのヒントが詰まっています。おけ風呂は、少ない湯で風呂桶内を温めるため、

燃料や水の節約になります。残り湯は、小便と混ぜて肥料として利用するので、川の水を汚しません。

現代の私たちは、昭和20〜30年代まで、農家で行われていた、おけ風呂の使い方から、「環境にやさしい無駄のない循環型のくらし方」を学ぶことができます。

ぜひ、琵琶湖博物館の富江家を訪ねてみてください。ピア樽のようなユニークな形をしたおけ風呂に実際にお風呂をいただきながら、ほんの40、50年前まで、農家の方々が実践していた「環境にやさしい」くらしの知恵について、考えていただければと思います。

▶ 富江家のおけ風呂



▼ C展示室 富江家

